

# 中小企業の現状と信用金庫の存在意義

[自発展開型]

慶應義塾大学経済学部 3 年：長田 次弘

指導教員：植田 浩史

## 1. 研究の目的

本論文の目的は信用金庫の独自性が失われている原因を明らかにし、業務内容の変化が信用金庫の収益構造にどのように影響を与えているのかを分析することである。

現在、中小企業の抱える問題は様々ある。たとえば運営資金の不足、自己資本比率の低下、人材や設備といった経営資源の不足などがある。こうした問題を大きく 2 つに分けると資金繰りといった資金面の問題と自己資本比率の低下や経営資源の不足といった経営面の問題に分けることができる。資金面の問題の原因としては「情報の非対称性」である。中小企業は上場企業のように財務状況を公開していないために金融機関から資金を融資受けづらい立場にいる。また中小企業向け融資というのはリスクの高い融資となるために、金利が高く設定されることがある。企業の財務状況を判断するうえでディスクロージャーを行っているか否かというのは非常に重要な要素となってくるのである。経営面での問題の原因となっているのは、事業規模の小ささ、後継者問題といった中小企業の根幹にかかわる問題が下人となっている。この 2 つの問題を考えるうえで信用金庫の存在は欠かせない。信用金庫は「一般金融機関から融資の受けづらい立場の者に融資をする」といった目的で当初設立されたため、中小企業のような企業には欠かせない存在なのである。また信用金庫は地域密着型金融機関とも呼ばれ、ある特定の狭いエリアを中心に活動し、1 つの企業と 20 年 30 年といった長期的な二人三脚のような関係を持つことが多い。一見この関係は信用金庫にとってネックとなるように見えるが、これほど長期的な関係をもつことによって双方に大きな役割を果たしている。企業側にとっては、長期的に経営面と資金面の支援をしてくれることによって企業の成長を図ることができる。信用金庫側にとっては、よく企業を知ることが

できる。よく企業を知るということは次に融資する場合に判断する重要な役割を担う。以上のことから中小企業にとって信用金庫というのは資金、経営どちらにも重要な存在である。